



# 金賞

(小学生一二年生)

## 「ぼくのたいせつないのち」

大阪市立嶋野小学校 一年 丹羽 郁登

ことしの冬、かぞくで、かきをたべました。口の中に、たねがのこりました。ぼくは、かきが大スキです。このたねを、うえたら、かきの実がたくさんできるかな。じぶんでそだてた、かきの実は、きつと、とってもおいしいぞとおもい、ベランダのうえ木ばちに、たねをうえました。お母さんは、「めなんて、でてこないわよ。」といいました。それでも、ぼくは、うえました。

春になって、お母さんがベランダからぼくをよびました。「めがでてる！」ぼくは、びっくりして、みにいきました。かきのめがでていました。かきのたねのかわをかぶったかわいいめでした。ぼくは、すごいとおもいました。じぶんで、うえたたねがめをだして、うれしかったです。となりで、お母さんがいました。「いのちって、すごいね。かきの実はいっくんの体にはいつて、いっくんのいのちになってくれた。かきのたねは、こうしてめをだして、また、実をつけて、だれかのいのちになるのかもいないね。このめは、いっくんのそだてたいのちだよ。」ぼくは、早くかきの実を、たべたいとおもいました。かきの木が大きくなって、たくさんの実をつけたら、じいじやばあばにもあげたいとおもいました。おともだちやかぞくといっしょにたべたいです。ぼくのそだてた、たいせつないのちを、ぼくのたいせつな人たちに、わけてあげたいです。

## 講評

食べた柿の種を育てるなかで感じたいのちの力強さやつなかりを、素直で子どもらしい言葉で表現している。母に柿の種が芽を出すのは難しいと言われながら、芽を発見したときの大きな喜びと、その喜びを「僕の育てた大切ないのちを、僕の大切な人にわけてあげたい」と続ける作者の優しい気持ちや伝わってくる。出てきた小さな芽と母の言葉から、自分がいのちを育て、つないでいけることを知る、母と子の温かい会話と話の広がりや印象的な作品である。



# 金賞

(小学生三・四年生)

## 「ぼくのかぶと虫」

大阪市立堀川小学校 四年 苅部 孝政

ぼくは二年生の夏、かぶと虫を育てました。おすだったので、カブキと名前をつけました。

毎朝、ぼくは目が覚めるとカブキを見に行くのですが、その日はカブキの様子がいつもとちがっていました。さわってもぴくりともしません。夜の間に死んでしまったのです。ぼくはせっかく大事に育てていたのに死んでしまって、まるで大切な友達を失ったようなやるせない気持ちになりました。そんなぼくを見て、お父さんが、

「ひょう本にしたらどうっ？」

と聞いてくれたので、ひょう本を作ることにしました。ひょう本にしたらカブキとずっと一しょにいられる、ぼくはそう思いました。

ぼくは早速ひょう本作りを始めました。まずは固まったカブキの体をえきにつけ、そつと足をひろげました。ひょう本にしてカブキはよろこぶかなあ、とまよいながら手を動かしていました。カブキをそのままの形で残すためには、カブキを虫ピンでさして固定しなければなりません。でも、ぼくはかわいそうで出来ませんでした。まだたましいは残っていると考えたからです。もし、たましいが残っていたらきつと、虫ピンでさされていたいと感じるだろうな。友達のように思っていたカブキにそんなことはできません。ぼくはカブキをひょう本にするのをやめました。

カブキは、よう虫のとき土の中にいたので、元いた場所に返してあげようと思いました。ぼくはカブキを家の近くの公園にうめに行きました。

「安らかにねむれますように。ぼくはカブキのことをわすれないからね。また会いに来るよ。」  
と言つてうめました。

土の中にはカブキの仲間がいるかもしれません。仲間に出会えているといいなあと思います。ぼくもときどき、その公園にカブキに会いに行っています。カブキは喜んでくれているといいなあ。

### 講評

飼っていたカブトムシ「カブキ」が死んでしまい、父の提案ですつと一緒にすることができるよう、標本にしようとするが、そんなことをして「カブキ」が喜ぶだろうか、死んでもたましいは残っているのではないか、そうであれば虫ピンで刺されたら痛いと感じるのではないかと、思い悩む心の動きが良く表現されている。最後は土の中はもと居た場所であると、近くの公園に埋めることにするが、作者の「カブキ」への気持ちとともに、心の成長をも感じられる作品である。



# 金賞

(小学生 五・六年生)

## 「私の生きた足跡」

姫路市立津田小学校 六年 玉田 智愛

私にとつての生きた証は、お腹にある大きなきずあとです。これは、私が病気とたたかった証でもあります。でも、プールや学校行事でお風呂に入るとき、友達にこのきずを見せることには少し抵抗があります。それでも、私はこのきずがないと生きていかなかったからこのきずがとつても大好きです。

私は三才の時に「小児がん」と診断されました。病気になって今年で八年が経ちました。それでも、まだまだ病気とたたかわないといけません。そのとき、まだ私は小さかったのであまり覚えていませんが、家族がそのときの話を、たくさんしてくれます。

病気が分かったとき、がん細胞が大きすぎてすぐに手術ができず、抗がん剤治療をすることになりました。その副作用はとてすく吐き気がしたりかみの毛もぬげ、全然ご飯が食べられなくなりました。

月日がたち、やっと手術ができるようになり、初めての手術は12時間程度かかったそうです。そして、またあのつらい抗がん剤治療が始まりました。ふつうの人では想像もできないくらいつらくて、しんどい治療です。それでも私は絶対に病気に負けたくありませんでした。私の母は「あきらめたらそこで試合終了。」とよく言います。だから「あかん、今ここであきらめたら元気になってみんなと遊べない。」という思いがずっとあり、頭の中で自分が頑張れるように思っていたのを本当にかすかですが、うっすらと覚えています。家族も先生もたくさん応援してくれました。

私には病気になったことよりも、つらい抗がん剤治療を受けたことよりも一番いやだったことがあります。それは、年に一度しかない誕生日が二年続けて手術になったことです。正直、しないといけないと分かっている一年に一回しかない誕生日になぜ辛いことをしないといけないんだろうと思いました。ふつうならケーキを食べてみんなでお祝いする日なのになんで私だけ



## 講評

お腹の傷は友達に見せるのは抵抗があるけど、今ではこの傷が大好きだと書かれている。小児がんの治療は厳しくつらい思い出ばかりであるが、つらいことにも耐え抜いた証である傷も含めて「自分」であるとし、前向きに考え「今は楽しい」としているところに作者の強い想いを感じる。一方で、最もつらい思い出は誕生日が手術と重なり二年連続でお祝いしてもらえなかったこと、としているところに素直な気持ちが表示されており、微笑ましさも感じられる作品である。

・・・とも思いました。でも、今なら分かります。あのとき、こんな思いをして頑張ったからこそ、今生きられているということ。少しずつみんなと同じように学校に行って遊ぶことができるというところ。

小児がんという病気になって、つらいことやいやなこと、お腹に大きな傷も残ったけど、学んだこともたくさんあります。私は、小児がんになったけど、今は生きることが楽しくて、とっても幸せです。



# 金賞

(中学生)

## 「命の重さ」

奈良県立青翔中学校 二年 小林 大悟

始まりは店で買ってきた一個の卵だった。重さは五十g。何の変哲もない一個の卵、これをふ卵器に入れる。ふ卵器のふたはいつも曇っていて、中は見えにくい。けれどその中で僕たちと同じ一つの命が、じわじわとはぐくまれている。

有精卵を割る時、そして混ぜるとき、命を食べているんだ、といつも思う。

約三週間後、ヒヨコが殻を破って産声をあげる。殻に穴を開け、小さな口をのぞかせヒヨヒヨと一生懸命息をし始めると、僕はいつもどきどきする。

二、三日すると羽も乾いて黄色や茶色のもこもこのかたまりになる。これがコケツと鳴きながら庭を駆け回る「鶏」になるのだからおもしろい。

その成長は驚くほど早い。一瞬目をはなしてから見返すと、一まわり大きくなっている気がする。大騒ぎの中、餌の世話、糞の処理、水の世話をして十六週間でメスは「初卵」を産む。初卵は小さいが、ずっしりと重い。手のひらにのせると輝いてさえ見える。

オスは名前をつけない。朝早くに大声で鳴き始め、メスにとびかかるようになると、僕たちは丸焼きかから揚げかの算段を始める。昔ほどの家も鶏を飼っていて、人が来るとさばいてふるまったものだ、と祖父が言う。

こうして残ったメスたちが毎日一個ずつ卵を産む。その数六羽、中雛たちが八羽。これから楽しみたのしみ。

メスたちは卵を産まなくなっても飼い続ける「家族」なので、名前が必要だ。最初の二羽は、ボリスブラウンにしては薄い色の、ちょうどカフェオレのような色合いだったので、「オレ」と呼ぶことになった。もう少し濃い方が「モカ」。今いる鶏の中の最年長になる。

少しモカの話しよう。

モカはとても賢い鶏だった。オレは元気で食いしん坊。モカは何か怪しいもの、へびや猫が現



れたら、必ず僕たちに知らせた。

放鳥しても、夕方オレンジ色が山の向こうに消えるころには、必ず自分で小屋にもどっていた。でもモカはもういない。朝みたら六羽のうちモカだけがいなかった。

ある日の夕方、放鳥していた鶏たちを小屋に仕舞った。家人はみな買い物に出かけ、僕の仕事だった。

いつものようにみな小屋かその周りに集まっていて、仕舞うのは簡単だった。いつも一番最後まで外で遊びたがる若い「ソルベ」をつかまえて、扉を閉めて網をかけた。僕は、全員の数を数えなかった。この時からもうすでにモカはいなかったのかもしれない。それか、夜のうちに野生動物が忍びこんで、モカだけ連れ去ったのかも。網は破れていないし、羽も飛び散っていない。とにかくモカだけいない。僕は泣いて、泣いて、泣いた。僕の責任だ。僕が確かめなかったからだ。大事に卵から見守ってきた子が、夜の闇の中で悲鳴をあげていたかもしれない。何か悪いものが、モカを引き裂いたかもしれない。もっとよく確かめていれば・・・。

何か月たっても、モカのことにはあきらめきれない。朝も昼も夜も、窓の向こうの田んぼや森を眺めては、小さな姿が走って来はしないかと思っている。コトツと音がすれば飛び起きて、確かめもした。

「モカなの？」

でも違った。モカは帰って来なかった。一度野良の鶏がいると聞いて見に行ったが、モカではなかった。だれか人間につかまって、そこでご飯と水をもらえていればいいのにも思った。または賢いモカのことだから、山の王のような強いキジかなにかの妻になって子孫を増やしているかもしれないと思った。

僕の手のひらに乗っていた小さな卵は、二kgの立派な命になり、家族として毎日抱っこして可愛がった。でも、お別れは唐突だ。

僕の心にも大きな埋まらない穴が開いた。命を扱うには覚悟が必要なのだろう。

買ってきた卵から始める鶏の飼育について、細かな描写で誕生から成長していく様子をわかりやすく記すとともに、かつて飼育していた一羽の雌「モカ」を突然失った経験を持ち出し、命を扱うための覚悟について綴られている。淡々と短い文を重ねて表現していることにより、自らの不注意で「モカ」を失ったのではないかと作者の強い後悔の念が、臨場感をもたせて迫ってくる。失って感じる命の言及に留まらず、命が育っていくことについてもしっかりと書けているところが素晴らしい。



# 銀賞

(小学生二年生)

## 「『いのち』ってなんだろう」

私立甲南小学校 二年 村松 謙

ぼくは、今年の七夕のたんざくに、おねがいごとを、こう書いた。「かぞくの命がえいえんでありますように」って。ぼくはいまコロナウイルスがこわいのだ。コロナになったら死んでしまうのかなって不安になることもあるし、大好きなじいじやばあばにも会えなくてさびしい。もしぼくたちがコロナになっていて、おとしよりのおじいちゃんやおばあちゃんにうつしてしまったら命のきけんがあるから、「今は大切だからこそ会えないんだよ」ってお母さんは言っている。だから、がまん。早くじいじやばあばやお友だちと前みたいに会ってあそびたいな。

ぼくはたまにお母さんにきくことがある。ぼくは一人っ子で兄弟がないから、「お父さんとお母さんがいなくなったら一人になるの？」って。「お友だちもいるし、結こんもするし大丈夫よ」ってお母さんは笑って言う。でも、ほんとにそうなるのかなくて、すごくさびしい気持ちになっていたら、お母さんがアルバムを見せてくれた。ぼくがお母さんのおなかにいるときの

写真だった。「えっ、これがぼく？」と、ふしぎな気持ちになった。だって、まるでいも虫みたいな形で、だんだんドラえもんみたいな形になって、さいごのほうは人の形になっていった。「人間ってすごいなあ！」ってわくわくしてきた。だって、お母さんのおなかにいたのに、ぼくはいまこうして元気に明るくすごしているから。ぼくは、大好きなかぞくをおもって、かぞくの命がえいえんでありますようにと書いたけど、大きくなったらお医者さんか発明家になりたい。そして、コロナみたいなウイルスがきてもまけない薬を作ったり、病気にかかっても苦いお薬がもつとのみやすくなるようによくして、お母さんのおなかから生まれてきた、大切なたくさんさんの命が、元気で明るくけんこうで長く長く生きてもらえるようにするぞ!!

## 講評

新型コロナウイルスの広がりから、大好きな祖父母や両親がいなくなってしまうのではないかと不安を感じる一方で、母から自分が母のお腹の中にいた時の写真を見せられ、だんだん成長していく姿を「人間ってすごいなあ」と思う話の展開がわかりやすく書かれている。人間のいのちの力強さを感じて、将来はコロナに負けないような薬を作ったりして、多くのいのちを守るような人になりたいという、子どもらしい決意に対し、思わず応援したくなる作品である。





# 銀賞

(小学生一・二年生)

## 「わたしにとっての『いのち』」

私立智辯学園和歌山小学校 二年 川久保 綾乃

「ひよっとしたら、妹は生まれていなかったかも？」

わたしの家は今、パパとママと妹とわたしの四人家ぞくですが、わたしは、パパとママから、そんな話を聞いたことがありません。わたしがママのおなかにいたころ、パパは自てん車にのっている時に交通じこで車にひかれました。いろんなほねが、おれ、はいにあながあいて大けがをしました。頭は大じょうぶでした。その時、パパはヘルメットをしていたからたすかったそうです。ヘルメットは、まっ二つになっていました。もしも、パパがその時しんでしまっていたら、妹は生まれていなかったと思います。わたしはそれを考えるとむねがくるしくなります。

パパがたすかったのは、ヘルメットのおかげだし、すぐにきゅうきゅう車をよんでくれた人や、いそいでびょういんにはこんでくれたきゅうきゅう車の人、びょういんで一生けんめい、ちりょうをしてくれたおいしやさんや、かんごしさんたちのおかげです。パパのいのちはたくさんの人のおかげでたすかったし、

そのおかげでわたしには妹がいます。だから妹のいのち、パパのいのちは、いろんな人とつながったいのちです。

パパがたすけたいいのちもあります。それは、今うちにいるねこです。このねこは、パパがちゅう車場でひろってきました。パパがひろわなければ、うえじにしていたか、車にひかれてしまっしんでいたと思います。き生虫もついていたので、どうぶつびょういんの先生におしてもらいました。だから、ねこのいのちも、パパだけではなく、いろんな人とつながっています。

わたしにとっての「いのち」は、こうやってだれかのおかげでつながっていくものです。うしなわれるともどってきません。自分のいのちも、自分以外のいのちも大じにしようと思います。

## 講評

自転車に乗っているときに交通事故にあつて大怪我をした父は多くの人に助けられた。その後生まれた妹と、父を助けた全ての人々を「つながりたいのち」と表現し、多くの支えによって一つのいのちがあるとする一方で、支えられるばかりでなく支えているいのちもあると父が助けた猫のいのちにも触れ、一貫していのちのつながりについて書いているところが素晴らしい。また、人と猫を同じ目線で捉えているところも子どもらしく印象的である。







# 銀賞

(小学生五・六年生)

## 「終わらない『いのち』」

宝塚市立宝塚小学校 五年 武田 奈々

私のおばあちゃんは、去年天国へ行った。

病気が少しずつ悪くなつて、最後には静かに息を引き取った。ちょうどそのしゅんかん、私はおばあちゃんのそばにいたので、お別れをすることができた。おばあちゃんの息が止まったときは、さびしくて悲しくて、なみだがたくさん出た。もう会えないと思うと、苦しかった。おそうしきの日に、ひつぎにお花を入れるときも、たくさん泣いた。おばあちゃんとの別れは、ただ悲しいことだった。

おそうしきが終わつてからも、悲しい気持ちは続いていた。最初は、おばあちゃんのことを思い出すようなものを見るだけで、とても悲しかった。もつといつしよに遊びたかったな、もつとやさしくしてあげればよかったな、と、昔のことばかり考えてしまっていた。でも、少したつと、今自分のできることを考えるようになった。そうしたら、おばあちゃんとの楽しかった思い出を忘れないようにしたらいいのではないかなと考えるよう

になった。そうすると、おばあちゃんのことを思い出しても、あまり悲しくないことに気がついた。やさいもをはんぶんこしてくれたおばあちゃん。私の好きなお肉をわけてくれたおばあちゃん。得意な琴を聞かせてくれたおばあちゃん。  
「ななちゃんはがんばりやだね。」  
と、いつもほめてくれたおばあちゃん。おばあちゃんのにこにこした顔を思い出して、私は幸せな気持ちになった。

それから私は、  
「いのちつてなんだろう」

と考えるようになった。ただ、息が止まるまでの時間が、「いのち」なのだろうか。なんだかそれはちがう気がした。おばあちゃんが天国に行ったあとも、私はおばあちゃんといつしよにいたときのことをよく思い出す。おばあちゃんのやさしい顔を思い出すと、まだおばあちゃんが私の中で生きている気がする。これは、おばあちゃんの「いのち」が、私の中に生きてい

るということかもしれない。それが、私を元氣付けてくれる。やさしい気持ちにしてくれる。おばあちゃんみたいに、まわりの人にやさしくしたいという気持ちになる。

おばあちゃんと過ごした思い出を大切にして、私はこれから自分の「いのち」を生きていく。それは、心の中のおばあちゃんといつしよに生きていくことだ。体の死がきてても、「いのち」は終わらないのだ。

おばあちゃん、これからも私を見守っていてね。

### 講評

祖母の死とその後の気持ちの持ち方の変化を綴った作品。悲しみを乗り越え、体の死が来ても、周りの人々の心の中に生き続ける限り、いのちは終わらないと考え、思い出を大切に生きていこうとする。祖母の死から現在までの、作者が感じた素直な悲しい気持ちと、意識をして前向きに変えていこうとする気持ちの両面が自分の言葉でしっかりと表現されており、心の動きと祖母への強い思いが読者に手に取るように伝わる作品である。





# 銀賞

(小学生五・六年生)

## 「自分のために生きる」

京都市立下鴨小学校 六年 田嶋 葵

祖母は死ぬまでの一年半、いちばん生き生きと生きていました――

一年半前から闘病中の祖母は亡くなる三カ月前、「ホスピス」という所に入りました。祖母はホスピスに入る前も入院をくり返していて、病院が私の家に近かったので、泊まりに来てくれる事もあり、私は祖母と過ごせるのを楽しんでいました。私は、ホスピスの事をよく知らなかったのですが、私から見た印象はとても居心地がいい所、という感じでした。共用スペースにある飲み物は自由に飲んでいいし、宿題をしていると、看護師さんが、「えらいね」とおかしをくれたり良い事づくしでした。そんなホスピスに入ってから祖母に笑顔が増えました。

元々祖母は、家族を優先して自分の事は後回しにする人でした。でも、病気になるってから祖母は自分のしたい事を言ってくれるようになりました。特に祖母が望んだ事は、ご朱印

集めや温泉旅行です。私や、いとこ、家族、祖父といっしょに楽しんでる時の祖母の笑顔はきらきらとかがやいていました。亡くなる二日前までとても元気で、歩行器で歩いたり、ふつうにおしゃべりを楽しんでいました。その次の日に会いに行ったら、祖母はほとんど寝ていましたが、たまにある事だったので、大した事ないと思っていました。でもその日の夜、母は祖母の所に行ったまま、次の日の朝も帰って来ませんでした。母のいない朝をむかえた日の放課後、すぐに祖母の所に連れていかれました。なんとなく、いやな予感にぞわぞわしていました。祖母の病室に行くと、ベッドに祖母がねていました。息は、していませんでした。祖母が病気になる時分から、「そこまで長くはないかも」と、覚悟はしていたつもりでも、とうとうつぎるし、やっぱりすごく悲しくて、辛かったです。

後で母から聞いた話だと、祖母は「やりたい事全部やれたし、孫も四人もできたし、思い残すことないわ」と言っていたそ

うです。

私は、祖母の死から五カ月たった今、「いのち」についても一度考えてみました。祖母は自分の事を後回しにしていた時と、残された時間を自分のために使った時、どちらの方が楽しく「いきる」事ができたのか、と。本当の事は祖母にしか分からないけれど、私は、思った事があります。「いのち」は長さだけじゃない。限られたその「いのち」を何のためにどう使うか。私は祖母から学んだ事を胸に新しい事にどんどんチャレンジし、「いま」を「じぶんのため」に生きていきたいです。

## 講評

闘病中の祖母は亡くなる三カ月前にホスピスに入院、自分のことは後回しにしていた祖母が自分のしたいことを言ってくれるようになったことを嬉しく思い、そして、「やりたいことが全部できた、思い残すことはない」と言って亡くなったことを聞いて、いのちについて考える作者。限られたいのちをどのように過ごすのか、大きなテーマに作者としての意志をしっかりと示している。お互いを思いやる家族の優しい気持ち伝わる作品である。





# 銀賞

(中学生)

## 「ヘアドネーションをしました！」

私立小林聖心女子学院中学校 二年 大原 知紘

私はこの夏休み、「ヘアドネーション」をするために、これまで伸ばしていた髪の毛を美容室で切ってもらいました。

私がヘアドネーションに関心を持ったのは、「小児がん」という病気で子どもががんにかかることを知ったことからでした。この治療のための薬の副作用で、髪の毛が抜け、病室でも帽子をかぶって過ごしている子どもがいるということ、また、髪の毛がなくなっている人に向けて、医療用ウィッグがあるということ、そして、そのウィッグを、本当の髪の毛で作り、子どもたちにプレゼントする取り組みがあるということを知りました。

また、テレビでは、ウィッグをもらった女の子が、美容師さん自分の好みの髪型に仕上げてもらい、頭にかぶって、にこっと鏡に向かって笑っているというニュースを見たことがありません。その笑顔は、とても嬉しそうで、またウィッグをつける前と

すらと残っている傷を見ないとわからないくらい、とても元気に毎日を過ごせています。でも、子どもが、病院に入院して治療を受けているという話を耳にすると、おそらく、これまで手術を受けたことがない同世代の人たちと比べたら、人一倍気にしていると思います。

『大変だろうけど、頑張れ!』と応援したくなります。そんな中、薬の副作用で髪の毛がないという状態になった人たちの応援を、自分の髪の毛でできるのは、とても魅力的だと思ったのです。

私は、五歳以降、背中まで伸びた髪の毛で三つ編みをしたり、ポニーテールにしたりして過ごすが当たり前でした。少し伸びたら、五センチくらい切ってもらおう、ということを繰り返していました。でも、ヘアドネーションをすると決めてからは、「後どれくらい伸ばしたら、切ってもらえるかな?」と、定規をあてて、髪の毛の長さを測っていました。「三十一センチ以上の長さが必要」というルールがあつたからです。私自身の髪の毛の長さも確保しようと思うと、結構時間がかかったなという印象です。

髪の毛を切ってもらう時は、例えば明るく振る舞っていても、実は髪の毛がないことで落ち込んだり、帽子で髪の毛がないことを隠そうとしていたりする人たちに、少しでも早く、私

比べると、とてもきらきらと明るかったのが印象的でした。実は、私も二歳三ヶ月のときに、「先天性胆道拡張症」という病気であることがわかって入院し、胆のうを摘出してパイパスを作るという手術を受けました。手術は成功したのですが、その後も毎年一回は必ず検査を受けて、術後の経過観察をするために病院に通っています。

私自身は、病院に入院していた頃はまだまだ小さすぎて、手術のことはほとんど記憶がありません。ですが、母によれば、手術は予定よりもかなり時間がかかって、病室で待っていた母は、とても不安だったそうです。また、手術が無事に終わってからも、数日間は、痛みがあつたからか、私がとても不機嫌で、いつものような笑顔がなかなか見られなかったと言っていました。

痛みの記憶がほとんどないのは、恐がりの私としては良かったと思っています。そして今は、手術したこと自体、お腹にうっの髪の毛がウィッグの一部となって、その人たちの手に渡り、気持ちも晴れやかに毎日過ごしてもらえたら良いなと願っていました。切ってもらった髪の毛の束は、どっしりと重みを感じました。頑張つて伸ばして良かったなと思いました。

いま、私の髪の毛は、十年以上ぶりに非常に短くなっています。でも、これは私の意思で切ってもらったことなので、とてもすがすがしい気持ちです。

### 講評

小児がんの子供たちがウィッグをつけて喜ぶ様子を見て、自分も小さい時にお腹に大きな手術をしたことを重ね合わせ、自分の髪の毛で病気の子たちを応援したいと「ヘアドネーション」に大きな魅力を感じ、取り組んできた様子が丁寧な言葉で綴られている。女性にとって大切な髪を、ウィッグとして届けたいという迷いのない気持ちは、十数年ぶりに短い髪になっても「すがすがしい気持ち」という言葉となって表現されている。そんな作者の優しさに心打たれる。



# 銀賞

(中学生)

## 「自分ができる事」

奈良市立富雄南中学校 二年 松谷 周香

先日、私は三十センチ以上あった髪の毛を切りました。人生二度目の「ヘアドネーション」をするために七年かけて伸ばした髪の毛を切りました。切った直後は少し寂しかったです。私がヘアドネーションに出会ったのは幼稚園くらいの時です。私の大叔母さんに教えてもらいました。小さい頃からずっとロングヘアが好きで物心ついたころから髪を伸ばしてしました。大叔母さんに「あなたの髪は長くて綺麗ね。」と言われたのがきっかけです。それからずっと伸ばし続けました。

初めてヘアドネーションをしたのは小学校低学年の時です。人毛のウィッグを無償で提供している団体に髪の毛を送ると数日後にはお礼のメールが届きました。当時の私はそのメールが嬉しくてたまりませんでした。見えない誰かがそこで喜んでくれる事が私もうれしかったのです。それから、もう一度寄付したいと思い、髪を伸ばし続けていました。

最近、悲しいニュースが私の耳に入ってきました。まだ小学

生のいとこがとても珍しい小児がんになったそうです。治療の手段が骨髄移植しかなく、骨髄を提供するには一八歳以上でないと出来ないそうで、私は何の力にもなれそうにありませんでした。そこで、長い髪を切って寄付することにしました。廻り回ってその子や病氣と闘っている色々な子に届くように。

私にヘアドネーションを覚えてくれた大叔母さんもがんで亡くなりました。最後は髪も全て抜けてしまったようです。薬で髪が抜けてしまうということは、病氣と闘ってもなお抜けてしまうということで、とても想像できないくらい辛いと思います。そんな辛い闘病生活の中でも、女の子が「可愛くなりました。」というプラスな事を考えて欲しいと思っています。私もおしゃべりたい、髪の毛をくくるのが好き、というのをも髪を伸ばしていた理由の一つでした。

「命さえあれば髪の毛なんて必要ない。」なんて思う人もい

るかもしれません。命は大切です。生きている事が大事です。でも、私は「髪は女の命」と言われるほど、女性にとって髪の毛は大切だと思っています。髪は個性の一つで、人の第一印象を決めるといっても過言ではないと思います。

大叔母さんには感謝しかありません。人の役に立てるといって、喜びを伝えてもらいました。骨髄バンクやヘアドネーションを少しでも多くの人に知ってもらいたいです。いとこが少しでも早く元気になることを願い、今自分ができる最大の事を常に考え、次に向けて綺麗な髪を伸ばしていきたいと思っています。私の髪の毛が誰かの生きる気力になることを願っています。

## 講評

髪の毛を褒められたことから始めた、病気の治療で髪の毛が抜けた女性に、女性にとって大切な髪を提供する「ヘアドネーション」を通じ、見えない誰かの役に立つことへの嬉しさを綴った作品である。始めるきっかけを与えてくれた大叔母は既に亡くなったが、自分にも人の役に立つことができるという喜びを与えてくれたと感謝する。このような活動をもっと知ってもらいたいという作者の思いに、つい今後ががんばってほしいと応援したくなる作品である。







# 銀賞

(中学生)

## 「まみちゃんの夏」

河合町立河合第二中学校 二年 伊藤 由真

私が小学三年生の夏、おばあちゃんはいなくなりました。おばあちゃんは、みんなに「まみちゃん」と呼ばれていた。私が聞くにはまみちゃんのガンは前から分かっていたらしい。

けれど、まみちゃんは病院が大嫌いで、入院はもろろん、病院に行くことさえ嫌がっていた。今考えると、病院が怖かったのだと思う。

まみちゃんの病気が悪くなってきたのは私が三年生になってすぐの頃だった。当時、医師から伝えられた余命はわずか三カ月だった。血糖値の検査で短期の検査入院をしたまみちゃんだったが、急激に悪くなり、家に帰って来られなくなっていた。余命が近づいていることを知ったまみちゃんは、家に帰ることを強く望んでいた。私の母は妹と二人姉妹で、祖父を交えて家族会議が開かれ、まみちゃんの望み通りにしようという事になった。母は医師や看護師のカンファレンスという会議に参加させてもらい、

まみちゃんは嬉しそうだった。まみちゃんが大好きな盆踊りの音も聞くこともできた。

お盆が過ぎるとまみちゃんは意識がなくなり、もう話すことができなくなった。母と叔母は交代で世話をしていたが、一週間くらい昏睡状態だったまみちゃんは、祖父、母、叔母の三人が見守る中、真夜中に息を引き取った。

最後まで家にいることにこだわったまみちゃんのことを尊重した在宅療養だったが、それが正しかったのかはわからない。入院していた方がもう少し長く生きられたかもしれない。しかし、まみちゃんの願い通りにしてあげたいと、家に連れて帰った家族はすごいと思う。私は母に、「ママがまみちゃんみたいになったら、私が家に連れて帰ってあげる。」

と言ったら、母は黙って涙を流していた。

「家に帰ることで母の命は短くなるかもしれませんが、望み通りに家に帰らせてあげていただけませんか。」

と頼んだ。叔母は在宅療養のため、点滴などの介護方法を習った。家に帰れると分かったまみちゃんはとても喜び、帰ったら夕ご飯を食べたいと楽しみにしていた。

しかし、待ち望んだ退院の日、まみちゃんは熱を出して帰れなかった。翌日、私は両親と一緒にまみちゃんに会いに行くと、看護師さんが母に、

「今日、これから帰りませんか。もう今日しかチャンスがないかもしれません。」

と言ったそう。それからすぐに退院の準備をして慌てて帰ることになった。あれほど退院を楽しみにしていたまみちゃんは、ぼーっとしていた。家に帰ったまみちゃんは元気に話ができる日もあった。夏休みに入っていたので、私は二日に一回くらい奈良から堺に通った。リビングで家族と一緒に暮らしている

### 講評

「まみちゃん」と呼ばれる祖母はそれだけで家族から強く慕われていることが伝わる。癌を患う自分の余命が残り少ないことを知った祖母の、自宅に帰りたいとの思いを「在宅療養」という形で叶えた家族。長く生きるという点から最善であったかどうかはわからないが、苦勞をしつつも本人の望みを叶え在宅で看取った家族の選択が正しかったことを確認し、かつそんな家族を誇らしく思っている様子がよく伝わる。祖母と祖母を想う家族、作者の優しきで包まれた作品である。







# 銀賞

(中学生)

## 「後悔」

有田川町立八幡中学校 二年 今西 美里

後悔。これはたくさんの方がもっているものだと思っ  
ています。年をとるにつれて人間関係が豊富になり、色々な人と  
出会う機会が増えていくと思います。中学校二年生の私がこ  
んなことを言うのは少し生意気かもしれませんが、後悔は、  
ふと思いつくと自分の胸が痛くなる思い出です。また、後悔  
によつて新しいことが発見できたりすることもあります。私に  
は、大きな後悔が一つあります。それは母のことです。

母は癌でした。私が小学校四年生の頃からです。母が病氣  
になった時期に、母と妹、私は大阪から母の実家の和歌山へ  
引っ越しをしました。母は週に二回ほど祖父が運転する車で  
病院へ行き、診てもらっていました。

ある日、母が入院したと祖父から聞きました。私は「なん  
で。」と問いました。祖父は、「癌の手術をするから。」と言  
いました。私は手術のことを一切知らなくて、初めて聞いた事  
実にとても驚きました。手術の後、母は元気な顔色で無事に

ばかりでした。それから手紙も来なくなりました。

一度だけ、私と妹は母のところへ行けることになりました。  
理由は、母はとても危険な状態で、いつ命を落とすか分から  
なかったからです。母の妹と、私の従兄弟二人も来ていま  
した。個室の病室に入ると酸素マスクを付け、血管にも針が入  
れられていて起き上がることもまともに話すこともできない  
母が居ました。私は母のそんな姿を見たことがなくてとても  
ショックでした。手を握ることはできただけ、話しかけてあげ  
られませんでした。母の手は震えていました。私と妹は、母が  
見えないところで泣きました。母と話したかったけど、悲し  
すぎて言葉が出てこなかったのです。これが私の一つの大きな後  
悔です。

私たちを待つていたかのように、次の日の朝、母の魂は天国  
へ行きました。その知らせを受けて信じられませんでした。母  
の身体が戻ってきました。信じがたい事実を突きつけられた  
ようでした。もうママは生きられへんのや、あと二年だったの  
に。私は現実を目の当たりにしました。いつもは化粧をしたな  
かった母の顔には化粧が施されていました。手は冷たかったで  
す。母の顔は笑顔でした。母の妹が私の母に向かって「お疲れ  
様」と言いました。それを聞いて、生きていてほしかったとい  
う思いが生きていてくれてありがとうと変わりました。

帰ってきてくれました。

その夜に、私はこんな話を母から聞きました。「手術が終  
わつてから五年経つと、絶対に生きられるんやで。」と母は言  
いました。話をしている母の顔は希望に満ちあふれていま  
した。母の表情をみて、私も嬉しい気持ちになりました。今から  
の五年が何事もなく、無事に過ぎますようにと思いました。

それから時が経ち、四年生だった私が中学校一年生にな  
りました。私の母は入学式にも来てくれ、桜が満開の校門の前  
で一緒に写真を撮りました。母と入学式にも出られて、こん  
な幸せなことは他にないと心の中で思っていました。

それからでした、母が入院を繰り返し日々が始まったのは。  
私は学校があるので母の様子を見に行けず、とても寂しかった  
です。妹も母の様子を心配していました。母からは手紙をも  
らっていました。手紙には、「元気ですか。私は元気です。ごめ  
んね、いつもごめんね。」と書かれていました。母はいつも謝つて

私の後悔は、最後に母に話してあげられなかったことです。  
この後悔は、私の人生ですと背負っていくものです。私は背  
負っていききたいです。後悔はつらいことです。でも、後悔は生き  
ていく上で大切なことだと今は思っています。

### 評 講

「手術から五年間再発しなければ生きられる」との言葉を忘  
れず、何事もなく五年が経過することをひたすら待ちわび、  
幸せな日常が長く続くことを祈るものの、母の癌の再発が見  
つかってしまう。母への強い思いの一方で、変わりゆく母に掛  
ける言葉を失い、最後の日に母と会話ができなかったとの無  
念の想いが、「後悔」として作者の心に残る。それでも、その  
「後悔」を背負って生きていくという、作者の母への思いと前  
に進もうとする強い意志が感じられる作品である。



# 銀賞

(中学生)

## 「命のストーリー」

私立近江兄弟社中学校 三年 岡崎 真心

「モォー、モォー」大きな声で私に声を掛けてくるのは、私の家で肥育している牛達です。「おっ、来たか。」という目で私を見ながら、優しく声を掛けてくれます。今までは近づくのも怖かった牛ですが、最近は近くに寄って鼻の辺りをかいてあげることも出来るようになりました。

中学三年生になった今年の春、思いもかけないコロナ禍で学校が休校になりました。その間ずっと学校に行けず、家で過ごしていた私に、父から家にいるなら牧場においでと声がかかりました。私の家は空気のきれいな山の麓で千頭近くの牛を肥育しています。父は朝早くから暗くなるまで牧場で牛の世話をしており、そのおかげで私たち家族は毎日楽しく暮らすことができています。最近は学校や習い事があり、めっきり牧場から足が遠のいていたのですが、この春久しぶりに牧場に行く機会が増え、牛達に対する気持ちに変化が訪れました。

最近父と一緒に牛舎の見回りをしたところ父しか見えなかった私が、急に牛達を身近に感じ、愛しいものと感じるようになったのです。

しかし、私の家は近江牛の肥育農家です。ペットではありません。時期が来れば、出荷しなくてはなりません。トラックに牛達が乗せられていく様子を見て、その現実をその事実をまざまざと突き付けられました。ショックでした。今まで当たり前だと思っていたのですが、こんなに胸が締め付けられるとは思っていませんでした。気持ちが悪く整理できなくて、黙り込んで私に父は言いました。「この職業についての限り、仕方ないことや。人間が食べるために生まれてきたんやで。でもその分育てている間は精一杯可愛がって、大事に真心込めて育てあげらんや。」と。

私に何が出来るのか、考えても考えても何も出来る事はありません。でも、牛達は間違いなく、私達人間に命を捧げてくれています。父からの言葉をもう一度しっかりと巡らせて考えました。やはり、私が出来る事はありません。何も出来ません。でも、父が言うように私達のために産まれ、命を捧げてくれるのならば、私の出来る事はその命をしっかりと見届ける事、そして残さず頂く事、それしかないと思いました。「いただきますー」と笑顔で手を合わせ、「おいしいー」と感じ、「ごちそうさま」と感謝する。これしか、牛達の命への恩返しは出

い時には穏やかに座っていた牛達でしたが、私の姿を見た途端、目を見開き牛とは思えない機敏さで立ち上がりました。私はその牛達の様子にとっても驚き、少し怖く感じました。しかし、よく考えてみると、本当に驚き、恐怖を感じていたのは牛達の方でした。今まで見たことのない人が突然やってきて、近づいてくる。牛ではなくても怖いはずです。成牛は六百キロを超えるほどの大きさですが、見た目とは違って繊細な動物なのだと言に教えてもらい、それから接し方を変えてみることにしました。

一頭一頭を優しい目で見て、ゆっくり本当にゆっくり近く。それから牛の前で立ち止まり、優しく声を掛けるようになりました。最初は疑うような眼差しの牛達でしたが、通い続けるうちに、近づいても逃げることがなくなり、いつの間にか、牛達の方から近づいてくれるようになってきました。そうなるにつれて、今まで牛という存在を考えるとすらしなかつ

来ないと思えました。

私は、牛の肥育農家の家に生まれ、牛達を自分の目で見、触れ合うことができます。私は、まだ父のように割り切れることも出来ず、これからも辛く感じることもあるでしょう。けれど、牛達の命のストーリーを実際に見る事が出来る立場に立つものとして、責任をもって愛情込めて育て、その命を粗末にすることなく、きちんと見届け、頂く。この気持ちはずっと忘れないように決めました。そして父と一緒にもっとも牛達をかわいがってあげたいと思います。

### 講評

牛の肥育農家として牛を愛しいものと感じれば感じるほど、出荷時に感じる胸を締め付ける思いに苦しむ作者。そんな作者に対し、父が心の持ち方を教える様子には、父の仕事としての使命感や覚悟を感じる。牛の個々のいのちを身近で感じた作者が考え抜いた結果としての、「私の出来ることはその命をしっかりと見届ける事、残さずいただく事、それしかない」との言葉には、私達のために生まれ命を捧げてくれる牛達への深い愛情と、これからの強い決意を感じる。



# 銀賞

(中学生)

## 「私の自慢のお母さん」

和歌山県立田辺中学校 三年 染道 琉花

私の兄弟は六人いる。私はその兄弟の上から二番目で、小さい時から姉のいると一緒に妹たちの世話をしてきた。「るくもだっこしてよ!」

とだだをこねたり、家族みんなで寝ている時、誰か一人がぎゃーぎゃーと泣くと、つられて四人の妹、弟が泣きわめくので、毎日家の中が騒がしかった。

生まれてから十五年、十人の家族と過ごしてきた中で、一番思い出に残っていることがある。それは、兄弟全員での集合写真だ。友達ととる写真はいいのだが、兄弟でとる写真は私の唯一苦手な物なくらい大嫌いだった。

写真をとる時、まわりの人が、「兄弟多くていいね。」

や、

「わいわいして楽しんでそうやね。」  
とにこやかな表情で見えてくるからだ。

も痛くて泣きたかった。四日目。今日の夕食はいつもよりマシな食事でもよかった。パパがふりかけを持ってきてくれたよ。ありがとう。五日目。二時半頃、家族の皆が来てくれた。嬉しかったよ。六日目。今日は七夕。これからもずっと、パパととるかととるくるととるむるととるんと笑って過ごせますように。その日で母の日記は終わっていた。私たち兄弟にとって、母のいない七夕は初めてだった。その年に作った短冊は、今までにないくらい、母のことでいっぱいだった。母が入院中、今まで以上に兄弟の面倒を見なければならなかった。でも、母の病気が治ってほしい気持ちが強く、ちっとも疲れはしなかった。

入院生活を終え、母が帰ってきた。私たちはみんなで母に抱きついた。もちろん大泣きした。この時私は強く思った。お母さんもどってきてくれてありがとう。この家族の兄弟に産まれてきてよかったな、と。

この日を境に、私は兄弟でとる集合写真が大嫌いなものではなく、大好きなものに変わった。写真をとる時、何を言われなくても嫌な気持ちにならなくなった。

母は術後、抗がん剤治療をし、つらい治療をたくさんしてきた。とても強いお母さんで、今は感謝とあこがれの存在だ。五年経った今も、時々激しいめまいで起き上がれなくなった。一日寝込む日もある。

「なんでもいいからとにかく早くとり終わってほしい。」  
その一心だった。

そんな生活がある日一変した。母がガンになった。乳ガンだった。

「ガンになった。乳ガンやって。」

母は震えるような声で話しながらも、私たちを安心させようと笑っていた。その言葉を聞いた時、私は涙が止まらず、夜中泣いた。もしかしたらお母さんが死んでしまうかもしれないと、学校にも行きたくなくなるくらい不安だったことを、今でも鮮明に憶えている。

母がガンだと分かったその日からたくさん検査をし、十日間の入院生活が始まった。

七月二日、入院一日目。とうとう大嫌いな入院生活が始まった。嫌だなあ。二日目。今日は手術。泣いたらあかんと思っても自然に涙が出てくる。三日目。手術が終わった。陣痛より

そんな母が最近、お店を始めた。自分の作った料理をたくさんの人に食べてもらうのが夢だったそうだ。夢だった仕事をしている母は、毎日幸せそうに、家に帰ってくると楽しそうに今日あったことを話してくれる。そんな母を見て、私も幸せな気持ちで話を聞く。

私のお母さんはだれよりも強く、優しい。

たまに強くあたってしまうこともあるけれど、やっぱり私は母が大好きだ。

母は私の自慢のお母さんだ。

### 評 講

大人数ゆえの悩みを知らずに大家族は賑やかで楽しいものと決めつける友人に対する反発心から、大嫌いであった家族の集合写真が、母の乳がん発病により一変し、かけがえのない家族が写るものとして、大好きなものに変わるという心の変化が良く描かれている。そのような大家族を支えてきた母に対し、治療を耐え抜いた強さを認め、尊敬し、全ての気持ちを込めて自慢の母だという作者の素直さが微笑ましく、また商売を始めた母のたくましさも印象的である。



# 銅賞

(小学生)

## 「どんぐりのなえ」

私立智辯学園和歌山小学校 二年 千丸 泰芽

ぼくは冬の晴れた日に、お母さんといっしょに山のそばの道をさん歩していたとき、山の下の水のないみぞの中にどんぐりを五つ見つけました。そのとき見上げてみたら、大きな太い木や、小さな細い木が、たくさん生えていました。お母さんとぼくは、

「この中に、どんぐりのなる木があるんじゃない。」と話しました。

どんぐりを持って帰ってお父さんが育てているジャボチカバの大きなはちのすみに、うえてみました。

春になるころ、どんぐりから芽が出ました。細いくきの先に小さなはっぱを二まいつけました。

ひろったどんぐりはおちていたけど、しんでいなかったことと、小さなどんぐりから元気な芽が出て育っていることがとてもうれしかったです。

## 「おぎゃあ」

と赤ちゃんが生まれてきました。まんまるの赤ちゃん。ぼくのと弟です。

じょさんいんという場所で、ぼくたち家ぞくみんなは弟をむかえました。お姉ちゃんがとり上げてお母さんのおなかからだっこさせてあげました。

トクトクトクトク、そとせ中をさわると、ぼくよりも早いスピードで心ぞうがうごいていました。「生きたい」という力を手のひらにかんじました。あたたかくてふわふわで、心がほわりとしてきました。

「元気に生まれてよかった。」

と、この時とても安心しました。お姉ちゃんは、ふるえてないていました。お兄ちゃんは、手をずっとにぎりしめていました。お父さんとお母さんは、しわくちやになつてここにこしてました。みんな、弟が生まれたことをとてもよろこんでいました。

小さいけど、いのちってすごい。みんなをこんなにしあわせにするんだな。みんなの思いがこもってるんだな。お兄ちゃんのいのちも、お姉ちゃんのいのちも、ぼくのも弟も、ぜんぶ、大切なたからもの。ぼくは、「いのち」のことを考えると、いつも気持ち「まんまる」になります。

そして、あの日、まんまるで生まれた弟は、いま、もっともっ

どんぐりをひろった山のたくさんの中には、どんぐりの家ぞくがいて兄弟がたくさんいるんだなと思いました。それに、山はぐるぐる回っているのだと思いました。

大きくなったどんぐりの木は、どんぐりをみのらせて、そのみがおちて芽が出てをくりかえしているのだと気がつきました。

大きくなったぼくのどんぐりのなえは、丸まいのはっぱをつけました。はっぱの形からコナラとナラガシワだとわかりました。

ぼくのどんぐりのなえも、もっと大きくなって家ぞくをふやしてほしいので、畑にうえかえようと思っています。

## 「まんまる」

私立智辯学園和歌山小学校 二年 中本 琉楓

「あつたかくて、やわらか。ほんわり、まんまる。」

これが、ぼくが体けんした「いのち」のかんかくです。

きよ年の十二月、まん月の日、夜明けにやさしいお日さまの光につつまれて、

とまんまるになって、ぼくにとびつきにきます。いつか教えてあげたいな。

「まんまるってサイコーだよ！」  
つて。

## 「命があるきせき」

西宮市立南甲子園小学校 三年 大恵 朱実

「命があることは、きせきなんだよ。」

母がそう教えてくれました。

家のにわの木にヒヨドリがすを作り、たまごを生みました。しかし、たまごはカラスに食べられました。セミも羽化の途中で死んでいるのをよく見ます。自ぜんの中ではよくあることだと思っています。でも、人間も同じだと母は言います。私のそ母は、母を生む前に赤ちゃんをりゅうざんしました。小さな命が、おなかの中で生きてしまいました。

人間はどれくらい生きられるのか、だれにもわかりません。生まれてすぐになくなる命もあれば、すごく長く生きられる人もいます。私のそ母は、百才まで生きました。どうして命の長さは、ちがうのでしょうか？

せんそうの時、ほうくうごうにかくれていたそ母のそ





# 銅賞

(小学生)

なりのぼうくうごうに、ばくだんが落ちました。もし、そうそ母がいたぼうくうごうにばくだんが落ちていれば、私は生まれていません。せんそうをけいけんしたそうそ母は、自分が生かされている意味を考え、百才まで一生けん命に生きました。いつもみんなに感しゃして、命あることに感しゃしているそうそ母でした。

命があることはきせきで、けつして当たり前でも、ふ通のことでもありません。「一生けん命」という字には、命が使われています。意味をし書で調べると、「命をかけて物事に当たるさま。」とありました。なぜ命の長さがそれぞれ違うのか、その理由はまだよくわかりません。しかし、一生けん命に生きないといけないことだけは、わかった気がします。命があるきせきを大切にして、しょう来は命をまもるしよくきょうにつきたいと思いました。

「が食べたい。」というのが、明子さんの最期の言葉だった。明子さんにとって、真っ黒な広島町の町と真っ赤なトマトという正反対の色の組み合わせは、どれ程むごかつただろう。

私が初めて訪れた広島町には、美しい山、静かに流れる川、ゆったりと走る路面電車があつた。しかし、原爆ドームを前にした私は、足が動かなくなつた。原爆ドームの近くで倒れた明子さんが見た、水を求める人であふれた川、原爆で焼けた地面の熱を想像すると、七十五年前の八月六日、まるで、その日のその場に私もいるように思えたのだ。

明子さんが愛用したピアノには明子さんの命が宿り、もつと生きたかつたという叫びが音色となつて奏でられているように思えた。

資料館の方と語り部の方は、私に、「もつと平和な時代をたのむよ。」と、声をかけてくださった。私に何ができるのか、まだ答えは出ない。しかし、明子さんの悲しい命の叫びを受け止めたい。明子さんの死を悲惨な過去のまま終わらせないために。

## 「明子さんの命の音色から」

私立甲南小学校 四年 井野上 碧泉

二〇二〇年の八月。私は、初めて広島を訪れ、はかなくて、悲しいピアノの音色をきいた。それは、原子爆弾投下から七十五周年で行われた「平和の夕べ」コンサートでの事だ。

そのピアノの側面には、ガラスの破片が突き刺さっている。広島に投下された原子爆弾の爆風に耐えて、奇跡的に残つた被爆ピアノだ。このピアノには、かつて持ち主がいた。河本明子さんという広島市の女学校に通うピアノが大好きな女性だった。そして、明子さんの書いた二十一冊の日記が平和記念資料館に保存されているのを知つて、私は、資料館や語り部の人から話を聞き、日記を読んだ。日記は日を追うと、戦争の激しさと共に、明子さんの生活も苦しくなつてきた事が分かつた。

一九四五年八月六日。広島に原子爆弾が投下された時、爆心地の近くにある税務署にいた明子さんは、爆風に吹き飛ばされ、翌日、急性放射能障害で亡くなつた。「真っ赤なトマト

## 「おじいちゃんの命」

私立智辯学園和歌山小学校 四年 成川 愛珠

あれは、一年生の一月ぐらいのこと。起こされた私が一階におりていくと、お母さんとお父さんがこまつたようなお話をしていた。おじいちゃんが死んだのだ。

おじいちゃんがまだ、生きていたころ、おじいちゃんにはんちしようになつて、病院に入院していた。この病気になる、いろんなことを、すぐに忘れてしまふんだ。その病院に、お母さんとおばあちゃん、弟とお見まいに行つた。

おじいちゃんが車いすにのせられて、やつてきた。すると、おじいちゃんは、おばあちゃんとお母さん、弟のことがだれだかわからないようだった。まあ、弟のことがわからないのはふつうだと思ふ。だって、弟とはじめて会うから。

一番おどろいたのは、おばあちゃんとお母さんのことを覚えていながつたのに、私のことは覚えていたこと。おじいちゃんは、その口で私の名前を言つたのだ。

「まなみちゃん。」

と、私の名前をよんだのだ。そのころは、なぜかわからなかつた。でも、やつとわかつた。おじいちゃんにとって、私が初まごだったから。大切なそんざいだつたから。





# 銅賞

(小学生)

おじいちゃんのおそうしきの時、お母さんが泣いていた。初めて見た、お母さんのなみだ。私も泣きたくなっただけど、ぐっところえてがまんした。おじいちゃんに、私は強いことを見せたかったから。おじいちゃんに安心して天国にいつてほしかったから。だから、おじいちゃん、天国からみまもっていてね。

## 「生きのびるとういふこと」

大阪府立大阪北視覚支援学校 六年 大坂 ひなた

「ピーピーピー!!」

突然声が出て、かんがえごとをしていた私はおもわず上を見上げました。

そこにあつたのは、ツバメの巣でした。

私たち家族はよく出かけて道の駅に行くのです。この日も、道の駅に来ていて、その屋根の上に巣を作っているツバメを見つけたのです。

あの声はツバメのひなたちが、親鳥にごはんをねだっている

声でした。(すぐく元気がいいんだなあ...)と思いました。そして、ツバメについて興味をもったので、調べてみることにしました。

ツバメは交尾をすると、卵を産みます。産まれた卵は親鳥たちが協力して温め、二週間ほどでふ化します。ふ化したばかりのひなはまだ小さくて一人では何もできないので、親鳥は協力して育てます。そして毛も生えてくると独立していき、巣立ちの練習を始めます。育て始めてから約二十日で巣立ちていきます。

ところが、巣の中で最後まで平和に何にもおそわれることなく生きていけるツバメはほんのわずかしきません。たいていは、天敵のクラスやヘビなどにおそわれて命を落としたり、ごはんが足りなくて命を落としたりしてしまうのです。巣立つ前のまだうまく飛べない時期などには天敵もおそいやすくなるので、命を落とす確率は高くなってしまうのです。いつ、どこでおそわれてしまうかわからないという世界の中で、ツバメは生きています。

このかこくで悲しい自然界で生きのびるといふことは、かなり難しいことだといえます。ツバメをおそう天敵たちも、自分たちをおそう敵がこないよう用心しながら生きています。そうしてやっと命が循環していつて、自然界の動物たちが生きていくことができるのです。ざんこなことだけれど、自然界はそうしないと命が循環していかないのです。

ここまで考えると、私たち人間がどれだけ平和かわかってきました。私たちは動物を食べるのに、食べられることはないからです。

私たちは、食べ物になってくれる動物たちに、感謝しなければならぬのです。普段はあまり意識しないかもしれませんが、私たち人間を平和に生活させてくれる動物たちがいることをわすれてはいけません。

これからも命というものの大切さを忘れず生きていきたいです。





# 銅賞

(中学生)

## 「入院を通して考えた『いのち』」

堺市立長尾中学校 一年 大石 美空

小学三年生になったばかりのころ、私は命について深く考えたことはありませんでした。もちろん、いつかは死ぬということは分かっていたけれど、それはずっと先の話で、「死」なんて全く無縁のものだと思っていました。

しかし、その年の五月、病気だと分かり、入院したことで、命に対する考え方が、大きく変わるようになりました。病気だという自覚もないまま、病院に連れて行かれ、次々と大きな病院を紹介され、そのまま入院することになりました。いろいろな検査をし、自分の病気が命に関わること、入院が長くなること、辛いちりようも受けなければならぬことを聞かされました。病気で入院するなんて、考えたことがなかったのですが、とてもおどろいたし、急に「死」が身近になった気がして、こわくなりました。

入院中は、いろいろな経験をしました。家族とは離ればなれになりました。その子は小学一年生でした。退院したら、遊ぼうという話もしていたので、とてもショックで、信じられませんでした。しばらく、夜になると思い出してしまい、涙が止まらなくなりました。急に、死が具体的で、身近なものになりました。

私は命について、深く考えたことはありませんでしたが、入院を通して、今まで無縁だと思っていた死はすぐとなりになり、生きていることは、決してあたりまえではないと感じました。

仲良く遊んでいた子がいなくなり、もう会えないと思うと、今までぼんやりとしていた死のおそろしさがはつきりしてきました。

今、私は普通の人と変わらない生活を送っていますが、それは私の命をつないでくれたたくさんの人たちのおかげだということをおぼえています。

人の命には、限りがあります。だからこそ、一日いちにちを大切に、自分も人の命を支えることができるような人になりたいです。

れになり、昼間は母が、夜は父が付きそってくれました。妹とは、二ヶ月に一度くらいの、一時退院の時にしか会うことができませんでした。ちりようはとても辛く、しんどくて一日中ベッドから起きられない日もありました。飲み薬はものすごく苦いので、アイスで包んで飲みました。それが自分の命のためだと分かっている、辛いのに変わりはありません。

でも、そんな辛い生活を、いろいろな人が支えてくれました。かんごしさんは、一人でいる私の話し相手になってくれました。他にも、ピエロの手品、クリスマスプレゼント、誕生日のパティー、阪神の北條選手がおうえんに来てくれたこともありました。たくさんの人たちのげましがあがり、私の命を支えてくれていたとも思いました。

同じ病棟内で、友達もできました。みんなも私と同じように重い病気で、辛いちりようを受けていました。みんなががんばっていたから、私もがんばることができ、辛い入院生活も、楽になりました。でも、ちりようの途中で、命を落としてしまいう子もいました。一番仲が良かった子は、私が退院した日に

## 「強くて脆い命」

私立箕面自由学園中学校 一年 櫻井 美羽

「美羽の弟は帝王切開で生まれるんだよ。」

私はこの言葉を聞いたとき、何も考えられなかった。

帝王切開というのは、子宮を開くことによって胎児を取り出すという手術方法である。

この帝王切開をするということは出産する準備ができていない段階で出産することになるため、完全に安全な状態ではない、とも言える。

このことを知った私は当時小学一年生だった。

「お母さんとお腹の中の弟が死んでしまうかもしれない」と思うと、私はいても立ってもいられなくなりました。

私はお母さんが入院している病院に行った。私はお母さんを見つけると、思わず抱き着いて、泣き出してしまった。

”もう一生お母さんに会えなくなったらどうしよう”  
そんなことばかり考えていた。

お母さんが家を離れてから、私は熱を出した。その原因が何かはわからないが、私はきつとお母さんがいないというショックのためだと思う。そんなことがあがりながらも生活していたある日、弟が生まれたという知らせが入った。しかも、お



# 銅賞

(中学生)

母さんも弟も無事らしい。このことを聞いた私は飛び上がった喜んだ。何より、お母さんと弟が無事で本当によかったと思った。お母さんの病院に行くと、弟は保育器の中に入れられていた。弟の体はとても小さくて弱々しく、チューブにつながれていた。だが、どこか力強さがあつた。

「がんばって生きるんだ」

という意志が伝わってきた。私は弟にとっても引きつけられた。この子も懸命に生きようとしている、そう思うと何事もがんばれるような気がした。

私が次、弟と会ったのはこの日から二週間後くらいの日だ。

その時にはもう保育器には入れられておらず、ちゃんとした赤ちゃんになっていた。私はとてもびびくりした。少し前まで保育器の中にいたのに、もうこんなに大きくなっていることに。そして私は、あの時、弟を抱きかかえた感触を忘れない。弟の肌はとても柔らかくて、まるで天使を抱いているような感覚になるほどだった。その時が私の人生の中で一番「いち」を感じた瞬間だと思う。なぜなら私はこの子が生まれる

ことを思ったときは、自分が生まれるまでどれだけの人が大変な思いをしたのかをもう一度考え直して、この「強くて脆い命」と向き合うべきだと思う。

「悲れない。いつまでも……」

神戸市立鷹取中学校 一年 榊原 亜衣

昨日からちよつと熱っぽかった。お昼に飲んだ薬のせいか、どうもだるくてしんどい。

「ただいま。」誰もいない。(ラッキー!!少し寝よう。)

私は迷わずソファに寝ころんだ。

……。

「おかえり。」(あつ、おばあちゃん!私が小一の時に亡くなつたおばあちゃんだ。これは……夢!)

「今日も変わったことなかったか?」(そうそう、いつも帰つたら、そう聞いてくれた。覚えてる。大好きなおばあちゃんの声、笑顔。)

「うん。大丈夫。何にもなかった。」(そんなことより、あのことを言わなきゃ。)

「これ食べるか?」(わつ、私の好きだったイカの天ぷらとクラゲの酢の物。おばあちゃんが亡くなって、食べられなくなったん

までを知っているからだと思う。この子が生まれるまで、どれだけの人達が、どれだけの時間をかけて、どれだけ大変な思いをしていたか、知っていたからだと思う。一人の子どもを産むのに、どれだけの人達が苦労していたのかを私はこの時実感した。それと同時に私は「いのちって強いな」と思っていた。お母さんや弟は、出産というとても大変なことをしたのに、それでも心臓は動き続けている。それってとてもすごいことなんだとばかり思っていた。だが最近私は「いのちって脆いものでもあるんだな」と思い始めた。例えば、もしあの時お母さんが重い病気にかかっていたら、もしあの時手術が失敗していたら、どうなっていただろう。命というものはたかさんのリスクを抱えている。それが良い方に傾くのか、悪い方に傾くのかによって、生死が左右されるということである。一歩間違えれば、命なんてすぐにくだけてしまう。

この経験を通して私は命の強さと脆さを学んだ。これからも私達はこの「強くて脆い命」を大切にしなければならぬ。いつかくだけてしまうなら、今にだってくだけでもいい、そんな

だった。)

「どうや、おいしいか?」

「うん。」(そう、この味。おばあちゃんの料理は全部、私好みだった。)

「おかしとカルピスもあるぞ。」

「うん、食べる。」(食べ物のことなんてどうでもいい。そんなことより、早くあのことを言わなきゃ。)

——気がつくと、私はおばあちゃんに抱きしめられていた。

「お前は小さな体で、ようがんばるなあ。自慢の孫やで。」(そう、この感じ、この匂い。私はおばあちゃんの孫。間違いなく一番かわいがってもらった。自覚あり。)

「うん。」(早く言わないと。入院して二週間もしないうちに、亡くなってしまうこと!今すぐ病院に連れていかないと。)

「おばあちゃんはな。ずーっと亜衣の味方やで。」

(……!)

母と姉の声がする。やつぱり夢か。

「風邪どう?病院行くか?」

「ううん。大丈夫。」

姉はスマホを見ている。午後六時半。いつも通りの日常——。

今、私たち家族は、おばあちゃんがいた家に住んでいる。できるだけおばあちゃんのいた時のままで。おばあちゃんとの



# 銅賞

(中学生)

思い出をこわさないように。小さいころの写真を見ると、私の隣で、おばあちゃんが笑っている。全部が私の大切な思い出。

「亜衣のおかげで、おばあちゃんはおばあちゃんになれたんだよ。」

いつもそばにいて当たり前の人が、急にいなくなった。初めての経験。私の人生で、一番悲しくてつらい経験。

「死ぬまでに一回は、亜衣と海外旅行に行くよ。でもその時はおんぶしてね。」

果たせなかった約束。なぜ助けてあげられなかったのか。後悔。後悔。多分一生。

一日三回、仏壇に手を合わせる。朝、学校に行く時。晩ご飯の時。寝る時。「見守っていてね。」なんて祈らない。絶対に見守ってくれているのはわかっているから。

おばあちゃんは、今の私を、どう思っていて見られているかな？頼りなくて、危なっかしい私を、ドキドキハラハラしながら見ているかな？でもこれだけは約束する。私が死んでから、胸を張って、おばあちゃんに会えるように、これから後悔の

少ない生き方をしていくことを……。

おばあちゃんと同じ約束したことがある。誰にも言わない。二人だけの秘密。

「亜衣。おばあちゃんとの約束、覚えてくれてたんやね。」

「うん。当然やん。」

「やっぱりお前はおばあちゃんの孫やわ。ありがとう。」

「おばあちゃん！私こそありがとう！」

——日常は続いていく。

## 「小さな命から考えたこと」

京都市立久世中学校 二年 角村 桃奈

「バクッ」

私は、その光景を目の当たりにした時、暑かったのが嘘みたいに、手の先から体が冷えていくような気がした。私の家のペットの魚に赤ちゃんが産まれ、数秒でその親の魚に食べられてしまったからだ。私は悲しかった。今まで、「大きくなれよ」

と、毎日えさをあげていた。どんなに寒い冬でも、きれいな家がいいだろうと震える手に自分で暖かい息を吹きかけながら水槽の掃除をしていた。それなのにどうして一生懸命産んだ子供を食べてしまったのだと、その魚を見つめた。その魚は、涼しそうな顔をしてスイスイと泳いでいた。魚の世界は厳しく悲しいものだと思った。私は人間に生まれて、幸せ者だと気づいた。そして、命の尊さとはかなさを知った。

それから数日が経った。私は姉と数日前の魚の話をしてきた。今、赤ちゃん魚が生きていたら少し大きくなっていたかな。性別は、何だったのだろうか。など色々話していた。姉も、すごく寂しそうに見えた。少しでもこの場を盛り上げようと、私は姉にこう言った。

「魚は厳しい自然で生きているから、えさと間違つて食べちゃったんだよ。私達人間は幸せだね。産まれてすぐこの世を去ることなんて、全くと言っていいほどないんだよ。」

姉は静かにうなずいて見せた。「でも……」と、その言葉に続いて、姉は私にあることを教えてくれた。

「でも、それは人間も同じなんだよ。医療があまり発達していない国は、免疫力が少なくて病気になったらすぐに亡くなってしまうったり、親のお腹の中においても、紛争や差別されている人々は、妊娠しているのにも関わらず殺されたりしているんだ

よ。今こうやって生きていることは、すごくありがたいことやなあ。」

私は、姉にそう言われたとき、すごく驚いた。人でも、魚と同じように産まれてすぐに亡くなってしまう、本当にそんなことがあっていいのだろうか。私はモヤモヤしていた。他の誰かが産まれて死んで、それを当たり前のように受け流していいのだろうか。何かしなくてはならない、どうすればいいのだろうか、そんなモヤモヤした気持ちになっていた。

そこで私は、自分に出来ることはないかと考えた。たくさんのお金を持っていないから募金も少ししかできない。何か誰かの為に役に立つことはできないのかと、ありったけの知恵を振り絞って考えた。数日経ってもそれが見つけられないまま夏休みの宿題をしていた。「何でこんなことを勉強しているのだろう。」と、思いながら社会のプリントの問題を解いていた。歴史を勉強する理由は、昔と同じ過ちを繰り返さないように、これをこれから社会で活躍する人々に伝え残すために勉強をする、そう先生が言っていたと思いついた。その時に、今の私に出来ることを思いついた。それは、伝えることをつなげていくことだ。例えば、世界では産まれてくる前に紛争で殺されること、医療が発達していない国では病気になって助からず、亡くなってしまうことを、私のように知らない人達に伝えていくことが





# 銅賞

(中学生)

重要だと思う。そして、教えてもらった人も、そのことを教えていつつなげていくこと、そうすることで何十年か経って、教えてもらった人が社会で活躍し始める。そうすると、日本の医療を教える動きが多くなり、一人でも赤ちゃんを助けることが出来るかもしれない。他の国でも、日本と同じように紛争をやめたら赤ちゃんだけでなく、もっと多くの人が助かる。日本人が世界にそのことを言えば、多くの人が笑って暮らせるだろう。

命の尊さ、大切さを知りそれを伝えること、つなげていくこと、これが今の私に出来ることだと思う。一人一人の命の意識を改めて実感し、つなげていくことが何よりも大切だと思う。

## 「リードの命」

京都市立修学院中学校 二年 酒枝 蒼空

クラリネットという楽器にとって「リード」は、必要不可欠である。楽器本体があっても、リード一枚が無ければ鳴らすこ

とができない。それほど重要なものだ。

クラリネットのリードは、「葦」と呼ばれる「イネ科の植物」が元の素材となっている。葦は世界各地で自生しているが、気候によって変化が著しいため、最近ではほとんどがフランス南部と地中海地方から取るそうだ。収穫されたリードは、選別し、最終的にリードとして使える素材は、収穫した全体の1割程度と知って驚いた。その他残った素材は、すだれなど、日用品として使用されるか、切り捨てられるものもあると知り、ショックだった。何気なく楽器店でリードを購入していたが、商品として並んでいるリード達は、とても貴重なものなのだと感じた。

普段僕は、吹奏楽部でクラリネットを担当しているので、毎日リードにお世話になっている。貴重なものだと分かると、今までよりも一層大切にしたい。ただ、一枚のリードの命は大変短い。短い命を少しでも延ばすため、先輩に教わった「リードを育てる」という工夫をしている。まず、購入したリードを体温に近い温度の水に十秒ほどつけて、水分を取り、乾かす。

これを、水につける時間を延ばしながら三日間繰り返し返す。次に、使いはじめは、慣らし期間として、吹く時間をはじめは短くして、徐々に延ばしていく。こうすることで、少しでも使える期間を長くしている。ただ、僕の場合、工夫して使っている期間を長く使えなくなってしまう。できればさらに工夫して、使える期間・命を延ばしていきたい。

一枚のリードを使える期間は短いので、一音一音丁寧に吹いていきたい。日々の練習で、リードの命について考えながら吹き、リードの力を最大限発揮し、良い音が鳴るように、今後も努力していくつもりだ。

## 「生命の物語」

京都市立双ヶ丘中学校 二年 大橋 梨沙

冷たい水がとんでくる。日差しがとてもまぶしい。私は、庭で妹たちと水遊びをしていた。暑い日には最高の遊びだ。遊びつかれた妹たちは、アイスを食べに、部屋にもどった。私は、何気なく、庭をぶらぶらしていると、一つの小さな芽が目に入った。「何の芽だろう。」なんでもないように顔をだしている芽はなんだかとても可愛らしくみえた。私はテラスに寝転がる。冷えた体には、太陽の光がとても暖かかった。ふと、先ほどの

芽のことを思い出した。その芽はとても小さかった。でもなぜか、頭の中には、はつきりと残っている。緑の芽が私に笑いかけた気がした。目を閉じ、芽のことを考えてみる。私はウトウトと、夢の中へ入っていった。

「ねえねえ。」

だれかが私に話しかける。そこには、さっきの小さな芽が、ひっそりと顔をだしていたのだ。その芽は、私の前で、みるみる大きくなり、茎ができ、葉がしげり、花を咲かせ…。

それはやがて、大きな木となったのだ。その木の幹は、とても太くてかたい。どんな力が加わっても、何がぶつかっても、決して折れない。そんな気さえた。私の前に立つ、立派な巨木。私を見下ろしている枝たち。その木は、たくさんの実をならしていた。どこからか風が吹く。葉は踊り、たくさんの実をおとす。

「オギヤー」

赤ちゃんの泣き声が聞こえた。おちた実が芽となり、顔をだしていた。命が生まれたのだ。一本の木から、いくつもの命が生まれ、育ちそれが大きな木になる。そして、また実をならし、命を育む。その命のつながりに、私はとても感動した。

気づけば、あたりは森となっていた。木によって出来た日陰に、コケやシダが育ち、どこから飛んできた種が育ち、花を咲かせる。そして、鳥や虫、動物たちもやってきて、この森で暮





# 銅賞

(中学生)

らしはじめる。とてもにぎやかだ。たくさん種類の植物、動物たちが、楽しそうに会話をしていた。

「良い天気ね。」

そんな、なにげない会話だった。私は、ふと気づいた。あの小さな芽から、こんなにもにぎやかで、豊かな森が出来上がったのだということに。植物も、命がつながっているのだ。何気なく顔をだしていたあの芽は、命の物語のはじまりだったのだ。今、この瞬間も、生き物たちの命は受け継がれ、つながっているのだ。

もともとも命が生まれ、育まれていったらどうなるのか。私は目の前に広がる木や鳥たちをみた。するとあたりは白い光につつまれ、不思議な光景が広がっていく。地球が緑と青の世界になっていく。そうか。この森が、もともとも広がって、たくさんの命が生まれたら、この地球、私たちの住む世界は、緑がいっぱい、自然豊かな場所となっていくのだ。私はとても幸せな気持ちになった。鳥たちと一緒に、空を飛んでいるような気分になったのだ。なんて素晴らしいだろう。植物たちの

## 「タガメが教えてくれた命」

私立関西学院中学部 二年 三木 煌太

僕は自然が大好き。

そして自然にいる虫はもともと大好き。虫の中でも、水生昆虫最大のタガメが一番好きです。

僕が虫を大好きになったのは、優しかった父の影響です。幼い頃、よく父と甲山に虫とりに行きました。採ったカブトムシがどんどん増えていき、玄関が飼育容器いっぱいになったこともありました。そして父と昆虫図鑑を見て、タガメをとってみたいとよく話してました。しかしいろんな場所を探しにいっても見つからないのです。それは絶滅危惧種だからです。そこでタガメ博士である姫路水族館の市川館長に会い、タガメの幼虫を分けてもらい育てることにしました。タガメの幼虫は生きたものしか食べません。そこで一匹百円の金魚を与えていました。大きくなるにつれてたくさん金魚を食べるので、家の近くの田んぼにいるオタマジャクシを捕まえて与えました。しばらくするとオタマジャクシを食べたタガメがあげれ出して死んでしまいました。なぜなのか。これは農薬のせいだと思います。田んぼで使っていた農薬がオタマジャクシの体にたまっていたため、それを食べたタガメが死んでしまったのだと

命は、私たちの生活、命ともつながっている。この世の中の命は、みんなつながっているのだ。小さな芽、ありがとう。大切なことを伝えてくれて。たとえ、どんなに小さなものでも命はある。命は大切にすべきもので、尊重するべきもの。命がつながって、今私はこの世界で生きているのだ。なんだか胸の奥がむずむずした。この発見をみんなに伝えたい。この素晴らしい世界をみんなに見せたい。そう、心の底から思った。

「ごはんよ。」

母親のやさしい声が聞こえた。なんだか良い感じがする。私は、仰向けになっていた体を起こし、現実の世界へ戻っていく。とてもすがすがしい目覚めだった。とても気分が良かった。庭のはしで、小さな芽が、楽しそうに揺れていた。

思います。田んぼは農薬を使っていて、田んぼに住む虫たちにとって危険なところ。田んぼは、お米以外にさまざまな命と一緒に育つところ。つまり田んぼは多くの命をつくり出すところでもあります。決して田んぼは、お米をつくる工場ではありません。虫にも命があることを忘れてはいけません。

僕は、あこがれのタガメと出会うことによって、たくさんの元気と生きていく力をもらいました。命ある虫を観察していると、心が落ちつき「シャキーン」と元気があふれます。虫がいる自然の生命力を求めれば答えてくれます。気分が落ち込んでいても、自然はたくさん元氣パワーをくれます。虫にも命がある。これは僕の父から学んだことです。

「お父さん、僕はようやくつらい時期を乗り越え元氣になりました。虫から命の大切さを学びました。これからは自然環境を守り、さまざまな命を大切にして、日々感謝して生きていこうと思います。お父さんありがとう。」



# 銅賞

(中学生)

## 「その日は、突然やってきた」

私立小林聖心女子学院中学校 二年 鈴木 媛釉

生まれた日に死にたいと思う——そんな人がいるだろうか。人はいつから自分の死を意識し、命を尊び、他者の命を大切にしたいと願うだろう。私は命の尊さと思う。

友人に恵まれ、優しい家族に囲まれてきた。不自由なく育ったそれまでの日々は、言うまでもなく自分の死や他者の死を意識したことはなかった。生命の溢れる世界で春に芽吹く桜の花を楽しみ、夏には門扉下に毎日転がる蝉の死がいを拾い土に埋め、短い命を精一杯生きた姿を尊ぶ。秋には虫の鳴く声に耳を傾けつつ急に静かになった庭先に寂しさを覚え、冬には木枯らしに吹かれ尚残る大きな落ち葉の下で静かに冬を越す就如同虫やだんご虫に「春まで頑張ってる生きて。」と心の中でそつとささやく、そんな日常だったと思う。まさか自分がその後、死にたいと思うなんて、その頃の誰が想像できただろう。

街で暮らし始める母や姉のことが気がかりだった。引越した後、母は二週間に一度は大阪へ帰ってきて、東京にいる時も夜には毎日テレビ電話で私の今日あったことを聞いたり、また母のエピソードを話してくれた。そんな優しい母や家族に心配は掛けられない。何とか自分で頑張りたい。でも、どうしても風になったんだろう。ただ辛く悲しい闇の中、死ねば楽になるという考えが頭をよぎった。

最初に私の変化に気付いたのは祖母だった。平気を装う私をよそに祖母は母に連絡し気付けば三、四日に一度母が大阪に帰ってくるようになっていた。母は一人で泣く私の隣に黙って座り髪をなで、一緒に原因を探していこうと励ましてくれた。そして半年が過ぎた中一の冬、私は母と共に病院を訪れた。

様々な検査と問診の後に聞かされた病名は、月経前症候群(PMS)。お医者さまから説明を受け、その言葉に思わず涙した。

「辛かったね。これからお薬を飲んで一緒に少しずつ治療していこう。そして一番大切な事、それは貴方は何も悪くないという事。」

自分が死にたいと思っていた辛い時期を思い出すと、今でも勝手に涙があふれるが、その度に思うことがある。もしいつ

その日は、突然にやってきた。頭がボーツとして、周りの友人の言葉が入ってこない。いつもなら楽しい友人とおしゃべりが、何とも無意味で無駄なものに思えてくる。世界が白黒に見えて、大勢の人の中にも、自分だけが異空間に追いやられているような感覚。ふいに涙が頬をつたう。無気力。力がでない。寂しくて辛い。頑張って勉強したのに、成績が下がっていく。いいのかな。こんな私が生きて、いいのかな。何度も何度も繰り返し返される自分の中の問い。家でも部屋にこもり泣くことが多くなった。学校に行かなくや。周りの皆が心配する。なるべく笑ってしよう。でも顔が引きつる。だめだ、こんな笑顔は私じゃない。私、変だ。こんな私がここにいていいの？地球にいてもいいの？辛い。辛いよ。絶望感しか、ない——。

私が中学生になった春に、我が家では姉も大学生になった。東京に進学した姉の為に両親は関東に家を借り、母が姉について東京へ行った。多少の寂しさはあったが、母が東京に行くことを私はそれ程、大変なことだと思わなかった。祖父母もいるし、私は今まで通りの生活を送れるのだ。それより慣れないかどこかで私と同じ病を発症し、生きているのが辛いと感じる人が現れたなら、母のように私は直ぐ救いの手を差し伸べる人になりたい——と。無理に笑わなくていい。その代わり自分の心のSOSに耳を傾けそれを周りの人にありのままどうか伝えてほしい。そのことが自分と周りの人を救う光の一步と成ると信じて。

治療を開始して半年、今では症状もほぼ治まり、私を救ってくれた家族と周りの人に深い感謝でいっぱいだ。私は自分と周りの人の命を尊び、愛しむことをここに誓う。

## 「機械のいのち」

京都市立向島東中学校 三年 中西 創志郎

世界には様々ないのちがある。犬や猫の動物、たんぽぽやそらの辺に生えている雑草にもいのちがある。生きるという使命をもって生きている。では、生物以外には、いのちはないのだろうか。普通に考えれば、道に転がっている石ころや、今使っているシャープペンシルに、生きたいと思う気持ちなんてないだろう。石ころもシャープペンシルも、生物に加工され、利用できる形に作られる、ただの道具にすぎないのだから。では、機械



# 銅賞

(中学生)

はどうだろう。たしかに機械も、人の手によって作られた道具だ。しかし、今では人工知能という、学習・推論・判断といった人間の知識と同じような機能を備えたコンピュータシステムがある。さらに、人間の形をしたロボットも開発されている。機械が人になろうとしているのだ。なら、機械にも生物と同じのちがあるのではないかと私は思ったのだ。機械にいのちがあるか、ないかなんてどうでもよい事だろうと思う人もいるだろう。だが、私は非常に大事な事だと思っている。

そもそものちというのは、生物が生きたために必要な最も大切なもので、尊いものだ。これが穢されれば、人は泣いたり、怒りの感情を覚えるだろう。ものにそれはない。機械にも、例えば工場で二十四時間車の組立作業をしたとしても、人とちがって弱音を吐くことはない。だって感情がないから。やめるといふ判断なんてできないから。だから人は、心置きなく機械に仕事をさせられる。だが、人工知能を持ったロボットならどうだろう。ほとんど人間と変わらない機械を、今までと同じ見方で、同じ使い方でのよいのだろうか。仕事だけではな

を持った生き物として見ようと思う。

## 「飛べない蝉」

大阪教育大学附属池田中学校 三年 中村 咲陽

「世界はいのちで溢れている。人はもちろん、動物や虫にだっていのちがある。そんな当たり前ことを私は少し前まで忘れていた。私がいのちと向き合うきっかけを貰ったのは、ただありふれた日常のほんの数分の出来事である。彼女は私に「生きること」を教えてくれた。

その日は六月が終わって間もない頃だった。私は勉強の気晴らしにと散歩をしていた。

家を出てすぐ、コンクリートの上にべちゃんこになった虫の死骸を見た。私は思わず顔をしかめそれを避けた。気持ち悪い、と確かに思っていた。

しばらく歩いていると、目の端で何かが微かに動いているものが見えた。小さい。私は歩み寄り、顔を近づける。蝉だった。クマゼミのメスだ。だけど、彼女はよほど成虫とは思えない姿をしていた。普通の蝉の半分ほどの大きさで、何より彼女の左の羽は「くしゃくしゃ」になっていた。おそらく彼女は早く出てきてしまったのだろう。

い。もし、家庭用にロボットが普及したとしよう。普及すれば、もちろんそれに関連した事件もでてくる。例えば、ほかの家のロボットを壊してしまったとき、このときの罪はきつと器物損壊になるだろう。しかし、このロボットの所有者が、家族同様にそのものを愛していたら、その罪だけで許すまでもよいのだろうか。その人から見れば、大切な人を殺されたのと変わらない、そういう思いの人もでてくるだろう。それほどまでに、いのちの価値というものは、はかりしれないのだ。非常に大事な事なのだ。

日本では、二三十年に超少子高齢化社会の到来によって、約九百万人の労働者が不足し、人工知能を活用した人間の生産性向上や不足する労働力の穴埋めなどといったことの協働は不可避だと言われている。そう遠くない未来に、先程言ったような、ロボットと共存することが起こりえるのだ。もちろん、ロボットの見方も変わっていくだろう。ロボットを一つの生命と見るか、ただの機械と見るかは、人によって異なり、世界でも大きな問題になると思うが、私は、一つのいのち

彼女は仰向けのまま必死に足を動かしていた。自分の、もう使えないであろう羽を伸ばすかのように六本の足で包み込む。だがもちろん、羽は丸まったままで、また、彼女のすぐそばには溝があった。六月の雨で湿めた溝だ。動く勢いで少しづつそれに近づいている。彼女がそこに落ちれば間違いなく助からないだろう。落ちなくても、限りなく少ないいのちだろうが、と思う。だから私はそのまま立ち去ろうとした。

その時だった。それまで仰向けで足を動かしていただけの彼女が、なんとか起き上がり、歩き始めたのだ。彼女は溝に沿ってゆっくりと進む。あたりには土も木もない、ただのコンクリートの道路だ。今更、何に向かってと私は思う。だけど確かに彼女の姿はたくましかった。

気づけば私は、彼女を近くの公園まで運んでいた。花壇の土の上におろすと、彼女は再び歩き始めた。今度は、近くの柵の棒を上ろうとしていた。柵はプラスチック製なので、すべり、掴むことができない。私は、それが痛たまれなくて彼女の進む向きを変えた。それでも彼女は柵を掴もうとする。何度も何度も何度、足をのばしていた。

木にのぼりたい、という思いが伝わってくるようだった。結局私は、彼女を木の根元まで運んだ。そこからは、ただただ見事だった。一分もしないうちに、彼女は私の目の高さまで木を



# 銅賞

(中学生)

のぼってきた。私は、そんな力が残っていると見えなくて土におろしてしまったことを反省した。そして、彼女が木の奥の方、葉に隠れてしまうまでその姿をそっと見ていた。

飛べない蝉だった。丸まった羽に十分でないからだ。生きることすら放棄してしまいそんな状況で、それでも彼女は何かに向かっていた。その懸命な姿は、私に衝撃を与えた。

私は今まで、いのちとは寿命であると考えていた。しかし、誰かが懸命に生きる姿を見ていのちを感じたり、「生きる」と「がいのちあるもの」にしかできないことであるなら、いのちとは「生きる」と「そのものではないか」と感じた。だからその日、彼女に出会う前、つぶれた虫を見て不快に思ったことを少し後悔している。そして私もあの蝉のように、いのちを大切にするために、精一杯生きたいと思った。

